

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K03002

研究課題名(和文)「逆説」のミドルマン－コーカサス総督府通訳官と「オリент」－

研究課題名(英文) Middlemen in the Contradictory Conjunctions: The Caucasian Viceroy and the Creation of the "Orient"

研究代表者

前田 弘毅 (Maeda, Hirotake)

東京都立大学・人文科学研究科・教授

研究者番号：90374701

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、コーカサス地域における多民族・多文化社会の歴史的形成過程について、通訳官家系などを例にとり、特に周辺諸帝国における宗教マイノリティの活躍と出身地との「往復」にも注目しながら、自己認識やオリент表象の問題について考察を重ねた。その結果として、境域と複数の帝国中枢を跨ぐコーカサス出身諸民族のマイノリティ・ネットワークが浮かびあがると同時に、通訳官のみならず、貴族階層から商人など、様々な形で現地社会と帝国政治中枢を橋渡しした人びとの活動が現地社会に与えた影響の一端を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、主にペルシア語とジョージア語史料を用いて、帝国とマイノリティの問題に注目し、彼らの出身地との往復だけではなく、帝国中枢ならびに出身地への照射も視野に入れて検討を行った。これはまた、オスマン帝国とヴェネチアの史料を用いて、カトリック・正教・イスラームの3つの宗教集団がせめぎ合う場としての近世東地中海史を描き出す最新研究の成果などとも呼応するものであり、近世から近代期におけるコーカサス地域社会の多民族・多言語・多宗教文化の相貌について、研究の嚆矢としての大きな意義を持つと考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study investigates the formation of the multi ethno-national societies of the Caucasus region in the early modern and modern periods. Special attention is paid to the family of translators and other middlemen who were shuttling between their home base and the imperial centers, associating with not only their co-religionist minorities, but acting with various communities of the imperial societies, thus bypassing cross-cultural communications. Self-recognition or identity formation especially within the questions of Orientalism was also investigated. This study reveals their ambiguous standings towards the imperial entities in the Caucasus facing transformation to the modern age.

研究分野：歴史学

キーワード：コーカサス 軍人 帝国 ジョージア/グルジア アルメニア ロシア・イラン・中東 通訳官 ミドルマン 奴隷

1. 研究開始当初の背景

19世紀初頭、ロシア帝国の支配下に入ったコーカサス(カフカース)は中東地域における近代化揺籃の地の一つに転じた。たとえば、近代イラン・ナショナリズムの祖として名高いアーホンドフ(アーホンドザーデ)は総督府の置かれていたトビリシにおいてムスリムの宗教的ファンティズムを批判し、文字改革を訴えるなど活発な言論活動を繰り広げたが、一方でロシア帝国には忠実な官吏(通訳官)として仕えていたことが知られている。

また、アルメニア人ナショナリストも、トビリシに結集し、いわゆるロシアのナロードニキ運動の影響を受ける一方、都市から農村ではなく、ロシア領アルメニア人地域から、オスマン帝国領のアルメニア人地域への浸透を図り、様々な帝国間の軋轢を生じさせた。こうした西欧ないし西欧化された帝国に仕えるマイノリティの「民族」官吏や近代教育を受けた「民族」知識人が、翻訳を含む言論活動を通じて、西欧由来のナショナリズムの媒介者(ミドルマン)として活躍した事例は様々な植民地社会に見ることができる。そして、高揚する民族主義はやがて帝国秩序そのものを破壊させた点において、彼らを仮に「逆説のミドルマン」と呼ぶこともできよう。

現地社会や「民族」知識人をめぐる様々な言説は、かつては、直線的な「民族国家」希求の動きとして、一般に各民族史の枠内で解釈され、回収・消費されてきた。近年の研究ではすでにこうした「民族神話」は相対化されつつあるが、実はこうした「知」の担い手に関する研究はいくつかの代表的な事例に民族史の枠で光が当てられてきたに過ぎない。諸文明の境界領域としてのコーカサス地域住民の歴史的活動に注目し、境を超える人びとの実相に迫る必要がある。そこで、本研究では、知の担い手としての通訳官の活動と社会的立ち位置などについて研究することで、近代コーカサス社会の知識人の姿と、「オリент」を巡る言説の生成環境の一端について明らかにする。

2. 研究の目的

本研究の目的は、19世紀前半におけるロシア帝国統治下のコーカサス(カフカース)総督府に仕えた通訳官ら帝国と現地人社会の橋渡しをした人びとの活動を、近代という時代性、ヒトとモノの交流史、帝国秩序と境域の関係史及び知的空間形成という主に3つの枠組みから検討し、具体的に通訳官という職業組織としての通訳官とその日常業務、通訳官を生み出した家系の社会的地位とその変遷、通訳官が知の伝達において果たした役割、特に「オリент」言説への意識や関わりを究明を目指すことにある。中東方面の最前線に位置し、ロシア帝国の重要な境域地域コーカサス総督府に勤務する通訳官は、「民族的言説」の初期の担い手・導入者の側面が注目されてきたが、帝国行政組織の一端に連なりつつ、知の伝達の一翼を担った立場から、その「逆説」の全貌を明らかにする。

ロシア人とロシア帝国「知」の複雑な葛藤なども念頭に、知識人の交流の広がり、帝国境域と帝国中央の関係、国家史・民族史の脱構築等を念頭に、ユーラシア社会全体の変動、近代国家形成、植民地の辺境・地域の秩序、特に境域の取り込みと分離的動きの3つの論点を具体的に考察していく。また、そもそもミドルマンは、その字義通りには、むしろ民族知識人の枠内に回収されたり、国民国家の枠には入らない「余所者」の側面も想定されうる。また、単なる「仲介者」「媒介者」でもなく、新たな価値を自ら創造する側面を持った。近代社会において、国籍・民族といった、生まれてくる様々な境界(特に国境)とこれを侵犯する人々との関係や、帝国の上から降ってくる境界と下から突き上げられる「民族」境界の間の秩序の担い手として通訳官の活動に注目する論点は尽きないと考えられる。特に職業的な外交官への移行問題について念頭に置きながらその活動にも注目する。今日では、いわゆる「イスラーム国」のような(民族を超えた・あるいは民族に乗り入れた)宗教の逆襲現象も発生している。通訳官の社会的位相を検討することで、分断された民族史を超えて、ロシア帝国・ガージャール帝国・オスマン帝国の間の境域社会としてコーカサス地域社会における近代化の特徴を明らかにすることの今日的意味もまた決して小さなものではない。これは、諸文明の境界としての重層的なコーカサス社会の特徴と、この社会が育んだトランスボーダーエリートの姿を浮き彫りとする作業である。

3. 研究の方法

本研究では、具体的には総督府の通訳官組織に関して、組織と構成員、業務内容に関する基礎的なデータの収集や、具体的な業務における翻訳活動と業務外で残した仕事に関連、また、業務に就く前の専門知の身に付け方、専門知の業務外での応用といったキャリアに関連する情報に注目する。専門知が「民族知」を耕す作業に翻案され、それが周囲に認識されていく過程も視野に入れながら通訳官という役職の検討を進める。

また、より広い文脈で、近世から近代にかけてのコーカサス社会において、オスマン帝国やイラン系諸帝国の支配のあり方、また、ロシア帝国が現地社会をどのように包摂していったのか、その中で「近代化」や「教化」とオリент言説はどのように展開していったのか、通訳官の関わりを中心に観察することで、現地社会と帝国、それに地域秩序変動、統治技術導入の様相をより立体的に理解する。

関連して、公共空間における公と私の乗り入れ（いわば「社会活動家」として活動）の問題、専門知の社会還元や「翻訳」活動についての自覚についても検討する。中東においては宗教的マイノリティの西洋知の伝達者としての役割も注目されている。また、文明知と外交知（インテリジェンス）の最前線に位置していた江戸幕府末期の通詞について、新たな知見が蓄積されつつある。比較研究の視点により、他地域の近代化言説、オリент表象を巡る議論に接続・成果還元を行う。

4. 研究成果

本研究の成果は大きく二つに分かれる。まず、地域史としてのコーカサス住民を取り囲んでいた多重的歴史環境の一端を明らかにした。特に、初期近代におけるイラン政権によるグルジア地方社会の包摂と分離を明らかにした。たとえばアリカンテ大学における国際セミナーにおいて、コーカサス出身者の領域横断的な活動について取り上げた、“Men of transformative: Caucasian converts at the Safavid court in the era of early-modern globalization”が挙げられる。この中では、グルジア豪族社会のダイナミズムと、これと西アジア・イスラーム帝国との接触により生じた人の移動について焦点をあてた。また、17世紀においてグルジア、アルメニア、ペルシア語を操り、グルジア史をイランで執筆したパルサダン・ゴルギジャンゼの写本についてトビリシで調査も行い、その境域的な活動について考察した。ゴルギジャンゼについては、ベルリンで出版された英語論文集にこれまでの研究をまとめた論文が収録された。また、やはり17世紀のサファヴィー朝で活動したグルジア出身4家系に関してイランでの出版も行った。

もう一点は特定の通訳官家系に関する研究である。「言葉の箱」の名字をグルジア王から授かったエニコロピアン家の活動に特に注目した。グルジア語、アルメニア語、ペルシア語、ロシア語等の多言語史料の収集に取り組むと同時に、解析についても順次進めた。彼らの出身地との往復だけではなく、帝国中枢ならびに出身地への照射も視野に入れて検討を行った。これはまた、オスマン帝国とヴェネチアの史料を用いて、カトリック・正教・イスラームの3つの宗教集団がせめぎ合う場としての近世東地中海史を描き出す最新研究の成果などとも呼応するものであり、近世から近代期におけるコーカサス地域社会の多民族・多言語・多宗教文化の相貌について、研究の嚆矢としての大きな意義を持つと考えられる。特にオランで出版された論文集収録の同家に関する論文は、アメリカやイランにおけるイラン系やアルメニア系名門家系からの反響も得た。

本研究の意義は、大きく以下の3点に認められると考えられる。第一に、近代という時代性を巡る研究への貢献である。たとえば独自の文化・言語に基づく知的体系を民族に分節・還元したものを仮に「民族知」、その担い手を民族知識人と呼ぶのであれば、東欧や中東における知識体系は宗教に基盤を置いたものから、民族に基盤を置いたかたちに分節化していく過程と捉えることができる。こうしたいわば「知」をめぐる社会変動に関する研究は、20世紀初頭からソ連期にかけてのロシア研究で大きく進展しており、ナショナリズム研究やオリент表象について、研究の進展は著しい。特にロシアは自らのヨーロッパ性に疑念を持たれ、常にねじれが存在していた。その中で研究が限られ、また民族ごとに分断されているコーカサスについて、通訳官を切り口に「民族」表象のあり方を明らかにすることができた。元来多言語に通じたハイブリッド性に特徴があったエニコロピアン家も、次第によりナショナル化せざるを得ず、「アルメニア性」を強めていったのである。

また、第二に交流の様相の変化、すなわち知識や技術の移動・伝播、転換と流入、そして物理的移動の早さや近代組織の制度設計の問題についても、行政官としての通訳官の職務にも目を配った上で、翻訳という知の伝達行為を巡る様々な権力関係の行使も確認することで、知の生成のダイナミズムを捉えた。この問題については全貌を明らかにするに至らなかったが、著作のバラエティなどを追うことで今後の研究への足がかりを得た。

さらに、第三の論点として、帝国と境域社会の関係の変化を追うことで、民族によって「分節化」していく地方社会トビリシという「場」を浮き彫りにした。これも未だ全体的な傾向をつかむところまでであるが、近世から近代社会への変動における様々な位相について追及することができた。

以上のように、本研究では、コーカサス地域における多民族・多文化社会の歴史的形成過程について、通訳官家系などを例にとり、特に周辺諸帝国における宗教マイノリティの活躍と出身地との「往復」にも注目しながら、自己認識やオリент表象の問題について考察を重ねた。その結果として、境域と複数の帝国中枢を跨ぐコーカサス出身諸民族のマイノリティ・ネットワークが浮かびあがると同時に、通訳官のみならず、貴族階層から商人など、様々な形で現地社会と帝国政治中枢を橋渡しした人びとの活動が現地社会に与えた影響の一端を明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 前田弘毅	4. 巻 15
2. 論文標題 特集にあたって：武を担った人びとの「ユーラシア的展開」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 メトロポリタン史学	6. 最初と最後の頁 1 - 7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田弘毅	4. 巻 58
2. 論文標題 正教聖地アトス調査行（2017年4月）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ユーラシア研究	6. 最初と最後の頁 54-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 1件/うち国際学会 13件）

1. 発表者名 Hirotake Maeda
2. 発表標題 Vakhushti Khan and Georgians in Khuzestan
3. 学会等名 International Webinar HISTORY OF GEORGIANS IN KHUZESTAN（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hirotake Maeda
2. 発表標題 A Note of Aleksandre Orbeliani on Kng Erekle II and Nadir Shah
3. 学会等名 International Conference Archival Studies, Source Studies; Trends and Challenges（国際学会）
4. 発表年 2020年

1 . 発表者名 Hirotake Maeda
2 . 発表標題 A Date on the Ascension of King Teimuraz I and its Surroundings from the Description of Tarikh-e ‘Abbasi
3 . 学会等名 International Conference The Middle East and Caucasus. Culture, History, Politics (国際学会)
4 . 発表年 2020年

1 . 発表者名 Tamar Lekveishvili and Hirotake Maeda
2 . 発表標題 Information about Georgia in Fazli Beg Khuzani Isfahani 's Work
3 . 学会等名 International Conference East and West: Linguistic, Cultural, Historical Interactions (国際学会)
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Hirotake Maeda
2 . 発表標題 Studies on the Georgian-Safavid Relations on the Basis ofFazli 's Information: How Giorgi Saakadze defected to the Safavid court?
3 . 学会等名 International Conference The Georgian Manuscript Heritage, National Center of Manuscripts (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Hirotake Maeda and Okropiri Jikuri
2 . 発表標題 Georgian-Greek Colophons, Added to the Greek Four Gospels, as well as Bilingual Inscriptions of the Plated Covers and Miniatures ' Georgian Inscriptions, preserved in Athos Karakalou Monastery Library
3 . 学会等名 International Conference Archival and Source Studies Trends and Challenges, National Archive of Georgia (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1. 発表者名 Hirotake Maeda and Okropiri Jikuri
2. 発表標題 Newfound Greek Gospel on Mt. Athos copied by Ashotan II Bagration's commission
3. 学会等名 International Kartvelological Congress (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hirotake Maeda and Okropiri Jikuri
2. 発表標題 Georgian Antiquities from Karakallou Monastery (Mount Athos)
3. 学会等名 The 16th Annual International Kartvelological Conference in Memory of St. Grigol Peradze (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hirotake Maeda
2. 発表標題 Voices of Caucasians at the Safavid court: life and activities of Parsadan Gorgijanidze
3. 学会等名 Recovering 'Lost Voices': The Role and Depiction of Iranian/ Persianate Subalterns from the 13th Century to the Modern Period, University of Edinburgh, UK (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hirotake Maeda
2. 発表標題 Georgian archival sources on the multi-faceted history of tavad-aznauris in Georgia
3. 学会等名 Archival Studies, Source Studies, Trends and Challenges, National Archive of Georgia, Tbilisi (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 前田弘毅
2. 発表標題 アトスからカラコルムまで グルジア王権とユーラシア帝国権力
3. 学会等名 日本アルタイ学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hirotake Maeda
2. 発表標題 Baratashvilis' Activities in the Safavid Empire and its Historical Meanings
3. 学会等名 7th International Symposium on Kartvelian Studies (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Hirotake Maeda
2. 発表標題 Men of transformative: Caucasian converts at the Safavid court in the era of early-modern globalization
3. 学会等名 International Seminar The Other Europe: Eastern Europeans and Safavid Communities in Spain and Its Wider World. The State of the Art and Lines of Research (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Hirotake Maeda
2. 発表標題 Shah ' Abbas ' s Military Campaign towards Ossetia and Didav From Fazli ' s Description
3. 学会等名 2nd International Scientific Conference "History and Antiquities of the Highland of East Georgia (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 前田 弘毅	4. 発行年 2022年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 104
3. 書名 アッパース1世	

1. 著者名 Rudi Matthee	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 766
3. 書名 The Safavid World (Routledge Worlds)	

1. 著者名 Buba Kudava and others (eds.) (Hirotake Maeda and Marina Aleksidze 分担執筆)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Artanuji (Tbilisi)	5. 総ページ数 822
3. 書名 Istoriani (“Some New Information on the Lives of Queen Ketevan278-286” 分担執筆)	

1. 著者名 前田弘毅	4. 発行年 2018年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 420
3. 書名 小松久男・荒川正晴・岡洋樹編『中央ユーラシア史研究入門』（担当「コーカサス」251-258頁）	

1. 著者名 Hirotake Maeda	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 258
3. 書名 Abbas Amanat and Assef Ashraf eds., The Persianate World: Rethinking a Shared Sphere (担当169-195 "Lives of Enikolopians")	

1. 著者名 チャールズ・キング著、前田弘毅監訳	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 467
3. 書名 黒海の歴史	

1. 著者名 David Thomas and John Cheswoth eds.	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 715
3. 書名 Christian-Muslim relations. A bibliographical history volume 10 Ottoman and Safavid Empires (1600-1700)	

1. 著者名 Hirotake Maeda tr. Mostafa Namdari Monfared	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Nashr-e Tamsal	5. 総ページ数 156
3. 書名 Chahar Dudman-e Gorji dar Asr-e Safavi	

1. 著者名 Michael A. Reynolds ed.	4. 発行年 2016年
2. 出版社 Markus Wiener Publishing Inc	5. 総ページ数 277
3. 書名 Constellations of the Caucasus: Empires, Peoples, and Faiths	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Exploring the Georgian and Caucasian World https://www.hmaeda-tmu.com/

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------